

2 保育において子どもの発達を促す

1 保育における子どもの発達とは

子どもが積み木を積んでいる。子どもがごっこ遊びを始める。砂場で穴を掘っている。庭でウサギの世話をしている。どれも幼稚園によく見られる光景である。その一こま一こまに知的な発達の芽生えがある。その折々に、子どもが頭を使って工夫しているかどうか、考えているのかがポイントなのである。

積み木を積んでいるときに、ただ機械的に、また力任せに積むのではなくて、一つ積んでは、うまく行っているかを考えているだろうか。かなり積み木に慣れてきたなら、全体として例えば「おうち」になっているかどうか、居間や台所らしくなっているかなどを考えて、それに合わせて、作り替えたりしているだろうか。

先生に、車が作れないから作って、と言ってきたときに、「自分で考えて」と言うだろうか。それとも、すぐに作ってやるだろうか。自分でも大体は作れそうだ、後ちょっとの工夫で行けると判断したら、たぶん、自分で考えさせるだろう。そうではなく、まだまだ作り方も見当がつかない3歳児などであれば、作ってやるけれど、子どもに作り方がよく分かるように、ゆっくりと手順を示すかもしれない。少し出来そうな子どもなら、ある程度先生が作って最後のところを子どもにやらせたりするかもしれない。

先生が子どもの考える力をいかに引き出すかは、子どもの有能感を大事にすることでもある。自分で出来た、と思えるように、程々に助力しながら、でも、完成して子どものイメージが実現するようにする。今子どもが出来そうなことを見取って、そこまでは子どもに任せつつ、出来そうもないし、子ども同士では解決できそうになかったら、助言したり、手伝ったりするのである。

園の中にはいろいろなものがあり、人がいる。その出会いの中で、子どもはいろいろなことに興味を持って、取り組む。こんなことをやってみたい、こんな風に完成してみたい、これくらい上手になりたいと思う。そこで、それを目指して頑張るだろう。

そのときに、ただやたらに力を入れて、頑張るだけでなく、ちょっと立ち止まって、どうしたら上手に出来るかなと考えるところで、完成度が上がるだけでなく、子どもの考える力が伸びるのである。他に上手な子がいるかもしれない。どんな風をしているのだろう。よく見て、真似しようとする。簡単に真似は出来るものではない。そこにささやかであっても、工夫が生まれざるを得ない。

熱中して取り組み、試行錯誤している内に、いつの間にかよいやり方をうまく見つけたり、完成したりすることもある。そういったときにも、自分がどのようなところを工夫して、うまく出来たのかとか、どんなことを見つけたかを振り返るようになると、知的な気づきが生まれて、その後の工夫に生きていく。

もっとも、どんな遊びだって、いきなり考えるところからは始まらない。特に幼児の場合にはそうだ。まずは熱中して遊ぶことが大切である。何度も繰り返している内に、少しずつ積み木でも、ウサギでも巧みに扱えるようになっていく。そこで初めて、工夫したり、考え込んだり、気づいたりする余裕も生まれる。小さいうちはまず慣れることそして試行錯誤することをたっぴりと経験させたいものである。

2 探求心を育てる

子どもが園に行き、新たに様々なものに出会う。今の子どもは、家にいるときには、家族の元で暮らし、テレビやテレビゲームや家の中の遊びをしていることが多い。3歳までであれば狭い範囲になるには違いないのだが、その上、今の社会では子どもの数も少なく、家の中で機械を相手に楽しく過ごすのが当たり前になっている。そういった狭いところでの暮らし方と、相手が楽しませてくれるという受け身のかかわり方を大きく広げるのが園の役割である。

「世界に出会っていくこと」というと、大げさかもしれない。でも、園に来る前の子どもの環境を思い浮かべれば、園に来て何と多くのもに出会うことだろうか。部屋には大きな積み木がある。もしかしたら、はさみを使うのも初めてかもしれない。砂場に初めて入る子どももいる。水をふんだんに使って遊ぶこともそれまでなかっただろう。草むらで初めて虫を探す。畑で野菜を育てていく。

同年代の子どもと遊ぶこと自体、それまで経験していなかったかもしれない。一人くらいはいたとしても、こんなに大勢で遊ぶことはない。親以外の大人と付き合ったこともありそうにない。

世の中にこれほど多くのものがあり、いろいろな人がいることを子どもは初めて知る。その一つ一つがただあるのではなく、その各々の特徴があり、個性を持ち、それにふさわしい対応がある。こうすればこうなると分かっていく。石の下を探すと、だんご虫が見つかる。触れば、丸まって面白い。でも、床に放り出しておくと、死んでしまう。

園に来ると、毎日のように発見がある。大勢で積み木を積み、巧技台をつなげると、大きな家が出来上がる。いろいろな知恵を出し合っていると、茶の間があったり、お風呂場が出来たり、素敵な2階建ての屋上のある家になったりする。宇宙基地になって、ロケットが発進するかもしれない。不思議なことがたくさん起こる。花びらを摘んで、水に入れて、つぶすと、水にきれいな色がつく。ジュースみたいだ。

子どもがいろいろなことに興味を持って、好奇心を発揮することで、発達の基盤が作られていく。その上で、もっと面白くしたいと思うところで、さらにそのものの性質を知ることになっていく。だんご虫を見つけない。園中を探し回る。どうもしめった感じのところが好きみたいだと分かっていく。だんご虫を集めて、飼育していきたい。どうやって生かしていったらよいだろう。先生に聞いたり、図鑑を調べたりする。水や食べ物があるらしいと分かっていく。

好奇心を広げ、次にそれが探求心へと育っていくのである。どうすれば、自分の願うように出来るだろうか。次にはどうなるのだろうか。その仕組みを教えてくれるものがどこかにないだろうか。子どもの興味は次第に知的なものへと育っていく。

探求心を育てるには、広がった好奇心をさらに深める必要がある。二段、三段と子どもの探求が進むところで、探求心が湧き出てくる。もっと知りたいと思って、もっと追求してみると、確かにもっと面白くなっていくという経験が元になる。ただボタンを押して、目を奪う光景が展開するというのでは足りないのである。自分の力を発揮し、どうやったら深められるかを工夫して、その先の広がりをものにしていく。物事のさらに奥を知りたいという気持ちは、表面だけで満足するのではなく、その先を実際に探求することで育っていくのである。

3 物事への関心を育てる

(1) 文字への関心を育てる

文字の読み書きは、小学校の教育の最も基礎となる学力のせいか、幼児でも重視されている。知的な発達を考えるとときにも、文字の読み書きを思い浮かべる人は多いようだ。しかし、実は、幼児期の文字の読み書きは知的な影響に強く影響するものではない。知的な発達はもっと遙かに広いものだし、幼児の活動の至る所で生じている。言葉の発達を取ってみても、その文字が読めることは大事だが、言葉の意味が把握されなければならない。

「氷」であれば、「こおり」と読めればよいのではない。さらに、氷は水が凍ったものだとして理解するだけでもまったく不足している。氷が触ると冷たいこと、暖まると解けて水になること、ジュースの氷も、冬に水たまりに出来る氷も、アイススケートの氷も、皆同じ氷であること、暑いときの氷は気持ちよいけれど、冬の厳しい寒さの氷はうっかり触ると手が凍り付くくらいだということなども分からなければ、氷という言葉を使えたことにならない。しかも、それは、絵本で情景を見て理解するだけでは足りず、冬の朝、息がハ－ハ－と白くなるときに、水たまりの氷に乗ってみたら割れたとか、取ってみたら、手がかじかんだけれど、透明できれいだったこと、それを落としたりガラスみたいに割れたこと、といった思い出と一緒に記憶されて意味を担うようになる。

現代の社会では、文字は覚えるのに特別なものではなくなっている。昔の時代だと、学校の教室で初めて文字に接したかもしれない。でも今は、幼児を囲む至る所に文字が見られる。絵本にはずいぶん小さい年齢から接している。大人向けの新聞や雑誌は幼児は読まないが、大人が読んでいる様子は見ていて、文字を読むという活動には馴染みがある。50音表なども貼ってあるかもしれない。台所や食卓に置いてある瓶詰めや食品の入った箱や飲み物の瓶には、必ず商標や説明書きが書いてある。外に出れば、至る所に広告があり、標識がある。「止まれ」の標識は形や色に特徴がある上に、曲がり角の度にあるので、すぐに覚える。

